

「接待」考—シンポジウムに寄せて—

石川重雄

いま日本の巡礼や参詣における「接待(摂待)」および関連の宗教的施設「接待所(接待寺)」の歴史について調べております。中国前近代における巡礼社会史研究の一端として、ことに宋代を濫觴とする「接待・施水庵」の精神・理念がどのように日本へ伝播したかを追い求めているからです。今回のシンポジウムにおいては四国巡礼、熊野参詣、西国巡礼にかかわる問題として、①参加者の階層、②庶民参加を支えた援助、③女人禁制・身分差別、④救済の思想・内容、⑤大衆化の時期・背景、の5つの争点が提出されました(内田九州男氏による総括)。「接待」の問題はまさに「庶民参加を支えた援助」のなかに包括されるテーマでもあります。「接待」については、従前、社会学(宗教社会学)、人類学、民俗学、歴史学など各方面からのアプローチがありました。これらの研究を踏まえ、与えられた紙幅のなかで、いささか「接待」についての考えを述べてみようと思います。

「接待」に係る施設として、わが国では、古代において布施屋があり、中世になると旦過庵・接待家などと呼ばれる施設が普及するといわれております。さらに近世になると四国の遍路に顕著であった無料宿泊所の遍路屋、遍路家、遍路宿、善根宿などという施設が知られております。ここに歴史的な用語理解のために日中相互の辞書類を渉猟してみましょう。中国の宋代(北宋960-1127、南宋1127-1279)は、ちょうどわが国の平安時代から鎌倉時代初にあたります。そこでわが国中世頃に成立したとみられる辞書『撮壤集』『運歩色葉集』『温故知新書』『頓要集』(『中世古辞書四種研究並びに総合索引』影印篇・索引篇2冊、風間書房)をひもときますと「旦過(たんくわ、たんぐわ、たんくは)」「接待」「行者(あんしゃ)」などの遊行・巡礼関係の語彙を見出すことができます。「旦過」は、北宋の禅院規範である『禅苑清規(ぜんえんしんぎ)』にもみえ、遊行する行者・僧侶が寺院に投宿することをいい、夕刻に来て旦(夜明け)に出立することから名付けられたといえます。宋代には「旦過」の宿泊所を「旦過寮」、そこに宿泊する行脚僧を「旦過僧」と呼んでいます。宋代における「接待」の内容をみると、巡礼者(あるいは旅人)にたいして飲料水・湯茶・宿・休憩所・食事・医療・路銀等の提供、さらには客死者の埋葬、川を渡る筏(いかだ)の用意、道路・橋梁の補修や管理をするなどの行為が含まれ、その施設としては寺院と宿泊所を兼ね備えた「接待庵」(接待院・接待寺・接待局)や「施水庵」(施水坊)などがみられます。その規模や種類にもヴァリエーションがあります。「接待・施水庵」の多くは富豪の家等の施入を受け田業を有し比較的安定した経済基盤を保持していたことが知られています(拙論「宋元時代における接待・施水庵の展開」)。わが国中世の辞書に載る「接待」は、後述する如く宋代の「接待」の精神が反映されたものとみられます。次にわが国近世の辞書として注目されるのは、日本のイエズス会によって刊行された『日葡辞書』(ポルトガル語の説明を付した日本語辞書、1603年刊)あたりでしょうか。当時、日本の情報を熟知した宣教師たちの編纂にかかるものなので貴重な資料といえます。この『日葡辞書』(『邦訳日葡辞書』岩波書店)のなかに以下の言葉があります。

- ① Dōxa. ダウシア(道者) Monomairino michiyuqibito. (物参りの道行人) 巡拝者〔遍路〕。すなわち、聖地巡拝に行く人。
- ② Fensan. ヘンサン(遍参) あちこちいろんな地方を遍歴すること、または、Yēguesos(会下僧)と呼ばれる坊主(Bōzos)がするように、ある修行をしながら、土地から土地へと歩き回ること。
- ③ Iunrei. ジュンレイ(巡礼) Meguri vogamu. (巡りをがむ) 聖地巡礼、または、聖地巡拝。 Iunrei suru. (巡礼する) 聖地を巡拝する。 …(略)…
- ④ Tangua.l, Tanguaya. タングワ。または、タングワヤ(旦過。または、旦過屋) 修道院付属救護所のような家

で、巡歴する坊主(Bonzos)の宿泊する所。 …(略)…

⑤ Xettai. (接待)巡礼や貧者などを招いて、茶(Cha)のもてなしをすること。

ここには中世の辞書にみえなかった「巡礼」が登場し、「旦過」や「接待」についても詳しい説明がみられます。

それでは宋代における「接待」の精神、「接待・施水庵」の実践が、わが国中世の寺院や社会にどのように波及していったのでしょうか。その接点として考えられるのが入宋僧らではないでしょうか。既往の研究にはすでにこうした指摘はありますが、もう一步踏み込んだ研究が必要かと思われます。入宋僧としては成尋、栄西、俊菴、重源らの名をあげることができます。彼らは五臺山や天台山へ赴き巡拝しております。成尋『參天台五臺山記』のなかには北宋時代に五臺山への巡礼ルートを中心に普通院あるいは普通禅院と呼ばれる施設がみられます。これは唐に渡った円仁も『入唐求法巡礼行記』に記しております。天台山麓の台州(浙江省)では南宋時代に左丞相の経歴をもつ官僚、銭象祖が「接待十処を建て、皆浄土極楽の名を付けた」という記録があり(南宋・志盤『仏祖統紀』巻四八)、接待庵とみられる施設が点在していたことがわかります。この天台付近には長逗留させて暴利をむさぼる「祖円接待庵」の記録も残されております(『夷堅志』支癸巻四、祖円接待庵)。如上の銭象祖は入宋した俊菴と面識があったこともうかがわれます(花園大学、王招国、修士論文)。もう一つ入宋僧が参禅した、禅宗五山第一に位置する径山(きんざん)寺の存在も注目しなければなりません。南宋・嘉定年間に住持可宣によって創建された雙溪化城接待寺は、寧宗により、化城の二大字ならびに接待院の額を賜ったと伝えられます。住持無準師範(ぶしゅんしばん)が雲水接待を目的として端平3年(1236)頃に創建した万寿正統寺も、理宗より宸翰ならびに額を賜っております。いずれも皇帝が「接待寺」を認識した表象としてうけとめられます。淳祐9年(建長元年、1249)に博多を出発し入宋した心地覚心は径山に止住し、径山寺の山麓の総門より六十里、山頂の寺塔までの間に化城と呼ばれる接待寺があったことを記しています。径山寺域外にはこの外にも寺僧や修行者によって接待寺が建てられており、本寺が「接待・施水庵」の精神の発信地としての役割を担っていたことも重要です。また覚心の門流である禅僧の恵甄(えしん)がわが国の熊野参詣者のために歙喜寺接待所を設け、これが入宋した覚心から直接間接に示唆されるものがあったという指摘もあります。歙喜寺接待所をふくめたわが国中世接待所については、相田二郎『中世の関所』、宮崎圓遵『中世仏教と庶民生活』、新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』、前田卓『巡礼の社会学』等で取り上げられ、その後公にされた伊藤正敏「地域社会と禅律僧—紀伊国和佐荘の鎌倉末—」「紀州の接待所と旦過」(『日本歴史』475、『日本歴史』539)の二篇は歙喜寺接待所の研究を深めたものであり、その接待所の性格は宋代の「接待・施水庵」を彷彿とさせるものといえます。

宋代の「接待・施水庵」の精神・理念は、皇帝から官僚、寺僧、庶民にいたるまで認知されております。入宋僧たちは、古来からの聖人の儒教的救済理念、仏教の經典に説く福田(ふくでん)・悲田の救済思想を肌身で感じ、同時に、民衆を巻き込んだコミューナルな活動が盛んとなる宋代社会の構造の変化をも脳裏に焼き付けて帰朝したのかも知れません。